

スタイル：01 原稿の種類 (企画特集、論文、研究ノート、書評) MSゴシック9ポ

スタイル：02 表題 MS明朝BOLD16ポ中央寄せ

—— スタイル：03 副題 MS明朝12ポ中央寄せ ——

スタイル：04 執筆者名 10.5ポ右寄せ5文字どり スタイル：05 所属 (所属機関名8.5ポ)

はじめに スタイル：06 見出し01

※「はじめに」「おわりに」は番号をつけないことを原則とします。

本文→スタイル：標準

『地域経済学研究』投稿論文における書式設定を説明します。この文章は、実際の文字数、行数に合わせて作成しています。

2段組み1段23字、43行になります。

和文フォントはMS明朝、数字と欧文フォントは半角でCentury schoolbookを指定します。本文の文字サイズは9ptです。原則として全角の欧文文字および数字は使用しないでください。

読点は「、」句点は「。」を用います。

1. 見出し(節) スタイル：06 見出し01

小見出しの順番は、1. 2. のあと、(1) (2) その下が、① ② の順で、最後が・(中黒)となります。

1. 2. (スタイル：06 見出し01)

(1) (スタイル：07 小見出し)

① (スタイル：標準)

・(スタイル：標準)

1. 2. は10.5pt MS明朝

(1) (2) は9ptMSゴシック

① ② の後ろに半角スペースを一つ入れてください。

見出しにつける() およびピリオドは全角とします。

2. 見出しタイトルが長い場合の折り返し方はこうなります

(1) 文章表現

文体は常体「である調」を基本とします。数字は、熟語など特別な場合を除き、アラビア数字を用います。分数は、「1/2」とせずに「2分の1」と書きます。数値の場合は、3ケタ区切りのカンマ「,」をつけます。数字および欧文文字は、半角数字・文字を用います。年号は、原則として西暦を用い、必要に応じてその後に元号などを括弧に入れて併用してください。

例 2013(平成25)年

(2013) ←年いれない

(2) 括弧について

本文中における() 「 」【 】等はすべて全角にしてください。

(3) 単位について

原則として半角英字を用います・

例 mm、km、kg、m² (上付き)

(4) 脚注

本文中に¹⁾のように、上付の数字に⁾をつけて明示してください。注の内容は、文末に整列させます。なおワードなどの注作成機能は用いしないでください。全体の通し番号とします。注記は節ごとでなく、論文の本文(および追記)の直後に1行あけ、「注」として一括して記します(後注)。注一覧の書き方は、左寄せ、番号順、番号ごとに改行、2行目以降は左1文字アキ。原則として、各注終わりは句点「。」、または英文の場合はピリオド「.」になります。

(5) 文献の参照

本文または注のなかで文献を参照する場合、【参考文献】欄に掲げられた文献の著者名と発行年をカッ

コ書き () します。引用ページは、() 内の発行年に続けて表示します。ページの表記は、「ページ」「頁」ではなく、「p.」(単一ページ)、「pp.」(複数ページ) で統一します。同一著者で同一年次に複数の文献がある場合は、発行年に a、b・・・を付けて区別します。複数の文献の場合は「;」(セミコロン) を付けて区切ります。また、外国語文献を引用・参照する場合に、邦訳があり、かつ原著と出版年の異なる著作については、原著の出版年と訳本の出版年をともに併記する形でも、参照した文献のみ(邦訳のみ、もしくは、原著のみ) を表記する形でも、いずれでも構いません。

- ① 本文または注のなかでの文献表記パターン
- 〇〇 (2023)
- 〇〇 (2023、p.11)
- 〇〇 (2023、p.11) ※英文献の場合
- 〇〇 (2023、pp.11-20)
- 〇〇 (2023、pp.11-20) ※英文献の場合
- 〇〇・△△・◇◇ (2023)
- 〇〇ほか (2023) ※4 著者以上のとき
- 〇〇 et al. (2023) ※英文献の 4 著者以上のとき
- 〇〇 (2021=2023) ※原著と訳本の出版年の併記
- (〇〇2023)
- (〇〇2023、p.11)
- (〇〇2023、p.11) ※英文献の場合
- (〇〇2023、pp.11-20)
- (〇〇2023、pp.11-20) ※英文献の場合
- (〇〇・△△・◇◇2023)
- (〇〇ほか 2023) ※4 著者以上のとき
- (〇〇 et al. 2023) ※英文献の 4 著者以上のとき
- (〇〇2021=2023) ※原著と訳本の出版年の併記
- ※複数の場合は ; で区切る
- (〇〇2023 ; □□2023)
- ② 本文または注のなかでの文献表記一例
- 池島 (2023)、(池島編 2023)、小山 (2023a、p.11)、
- (小山 2023b、pp.11-20)、池島・三輪・佐々木 (2023)、
- 池島ほか (2023)、(池島ほか 2023)、Kuwada (2023a、p.11)、
- Kuwada et al. (2023b、pp.11-20)、(三輪 2023 ; 杉山 2023)、
- Kuwada (2021=2023c)、桑田 (2023c)、
- ルフェーブ (2000)。

「池島 (2023) によれば・・・」のような表現も可能です。

3. 図表

(1) 図表

図表は、本文の一段の幅に収まるか、それより大きく二段分の幅が必要かの 2 種類に区別します。高さは幅に応じて適宜調整してください。なお、写真については、図として扱います。

※図表の元データは、エクセルファイルなど加工可能な電子ファイル形式で、別添で提出してください。図は外枠無しの設定で作成してください。

表 1 **スタイル : 08 キャプション**

| | | |
|----|--|--|
| 図表 | | |
| | | |
| | | |
| | | |

注 :
出所 :

キャプションは図と表とも上部に入れてください。図と表それぞれに通し番号を付けてください。図表キャプションの書式は MS ゴシック+Century、文字サイズは 8pt です。

注、出所は、図表の下部に左寄せで入れてください。書式は、MS 明朝+Century にて「注 1:・・・」「注 2:・・・」「出所:・・・」で統一します。出所は、注の下段に挿入します。注の番号は図表ごとにふり、各図表下にまとめます。注が一つの場合は特に番号を振る必要はありません。文字サイズは、注・出所ともに 8pt です。

(2) 図表の色

本誌はカラー印刷しませんので、図表も白黒印刷で明瞭に読み取れるように色指定をしてください。

※ただし、J-STAGE 用データはカラー対応可。

(3) 配置

図表の配置は通常、本文で最初に当該図表が言及される位置以降で、ページの上部または下部に接するように挿入します。

4. 参考文献・英文要旨・別刷り

(1) 参考文献

参考文献²⁾は、注一覧の後に、一行あけて一覧を

つけます（下記を参照）。参考文献の表記方法には、日本語文献（邦訳文献）の場合 2 パターンあります。原則はパターン 1 としますが、投稿者の論文の性質に応じて選択ください。パターンの見本は、後ほど説明する【参考文献】欄を参照ください。外国語文献は、1 パターンです。

① 参考文献の並び

参考文献の並びは、次のいずれかより選んだうえ、全体を通じて統一してください。

- ・日本語文献（五十音順）→外国語文献（a→z などアルファベット順）。
- ・外国語文献（a→z などアルファベット順）→日本語文献（五十音順）
- ・日本語文献・外国語文献の混在（a→z などアルファベット順）

② 邦訳された外国語文献の原著表記

邦訳された外国語文献については、あわせて原著表記をします。表記にあたっては、邦訳文献→（原著文献）、原著文献→（邦訳文献）いずれの順に記載しても構いません。具体的な記載見本は【参考文献】欄を参照ください。

資料については、文献と一緒に記載しても、文献と資料を分けて記載しても構いません。URL を参照した場合は、資料名の次に（ ）内に、参照 URL と閲覧日（もしくは最終閲覧日）を記載ください。

文献の記載は、1 段落につき 1 文献です。1 文献の記載内容が複数行にまたがる場合は、2 行目以降の文頭を 1 文字分空けてください（日本語文献・外国語文献共通）。各段落の区切りは、日本語文献の場合は句点「。」を外国語文献の場合はピリオド「.」（外国語文献）を付けてください。

(2) 英文要旨一次のページを参照

「論文」および「研究ノート」においては「掲載が確定した段階」で、英文要旨の提出が必要です。英文要旨は、後述のフォーマットを利用して概ね 15～30 行に収めてください。なお、可能な限りネイティブチェックを受けていただくことを推奨します。

※英文要旨に改行があるものは J-STAGE に英文要旨の掲載ができませんのでご注意ください。

(3) 別刷りについて

別刷りを希望する場合、入稿後の初校時に申込書の提出をお願いします。20 部までは無料、20 部以

上については著者に経費の負担をお願いします。

注

- 1) **スタイル：09 注の書式**は、MS 明朝+Century、フォントサイズは 8pt、行間 1 行です。「インデント」で「右インデント幅」を 1 文字に設定します。
- 2) 参考文献についても、書式は同様です。

【参考文献】

池島祥文（2019）「市町村別農業生産額推計の手法開発とその試算」『農業・農協問題研究』68（2）、pp.33-43。

岡田知弘（2005a）『地域づくりの経済学入門』自治体研究社。

倉敷市「地区計画」（<https://www.city.kurashiki.okayama.jp/tikukeikaku/>、2021 年 11 月 16 日閲覧）。

ハーヴェイ, D. 著, 森田成也・大屋定晴・中村好孝・新井大輔訳（2013）『反乱する都市—資本のアーバナイゼーションと都市の再創造—』作品社（Harvey, D. (2012) *Rebel Cities: From the Right to the City to the Urban Revolution*, Verso）。

Harvey, D. (2012) *Rebel Cities: From the Right to the City to the Urban Revolution*, Verso（ハーヴェイ, D. 著, 森田成也・大屋定晴・中村好孝・新井大輔訳（2013）『反乱する都市—資本のアーバナイゼーションと都市の再創造—』作品社）。

Miyamoto, K. (2004) “Environment Regeneration in Yokkaichi”, *Environment and Pollution*, 34(3), pp.35-40.

※日本語文献（邦訳文献）は、上記の表記方法（パターン 1）を原則としますが、資料を多く参照する論文の場合、掲載ページ情報を記載しない対応が適切ならば、投稿者の判断で記載方法を選択しても構いません（パターン 2）。

岡田知弘（2005b）「ものづくり、地域づくりの前進のために」『中小商工業研究』第 82 号。

※なお、1 文献の途中で改行はしないでください。改行がある場合は、J-STAGE で参考文献の掲載ができません。

〔付記〕

科研費など外部資金を用いた研究であることを示す必要がある場合は、投稿者の判断で付記する。

